鍋島怪猫傳

帝キネ時代映畫

原作並脚色者　松平昌之
監督者　長尾史錄
撮影者　谷口禎

――主要役割――

藩主鍋島丹後守　寳川延松
家老渡邊三左衛門　片岡童十郎
重臣龍造寺又七郎　清水隆之助
指南役關善六郎　市川海老三郎
重臣伊東忠太　沖田英二
若藩石田大隅　金井龍三郎

寫眞　「鍋島怪猫傳」帝キネ長尾史錄作品。右より寳川延笑と松枝鶴子。

忠臣小森半左衛門　吉川繡二
丹後守愛妾お豐の方　松枝鶴子
又七郎の妻お政　若柳みどり
小寺半左衛門の母お峰　尾崎靜子

解説――長尾史錄氏の「蟻地獄」に次ぐ作品である。

略筋――佐賀の大守鍋島丹後守は病中の徒々に重臣龍造寺又七郎を相手に圍碁を爭つたが、極度の殿の焦慮は又七郎を斬り捨てゝ了つた。指南役關善六郎は惡謀を廻らし、死體を士藏の墺に塗り込んだ。一方龍造寺の若徒石田大隅は報復を誓つた。夜な〳〵城の内外に起る悲劇と怪猫の出現――時たま〳〵忠臣小森半左衛門の母の死――愛妾のお豐の方の怪奇なる行動は怪猫に結びつけられて城の内外に流布された。關善六郎は殿の病勢の昂ずるにつけ忠臣小森半左衛門、家老渡邊三右衛門を陷れたが、誠忠小森、伊東忠太は怪猫の背後に動く人物あるを知り、遂に亂闘の末石田大隅を取り押へた。斯くて關善六郎の惡謀を知つた渡邊三左衛門は城中に馳け付けたが、病に惱まされた大守は無我夢中の裡にお豐の方及び關善六郎等の惡人を斬り捨てた時であつた。斯くて佐賀三十四萬石は再び平和な日を迎へる事が出來た。